

シデコブシは、落葉性の小高木および低木で、高さ5m程度のもが多いですが、稀に高さ15m、幹の太さが直径20cm以上にまで生長するものもあります。4月初旬に淡紅色や白色で、普通のコブシと違い枚もある花を咲かせます。花びらが神道で使われる「シデ」に似ていることから「シデコブシ」になったと言われています。また、8月ごろに赤色の果実が熟します。

シデコブシは日本個有の種で、世界中でも日本の東海地方（岐阜県、愛知県、三重県）を中心に希少な東海丘陵要素植物の一つです。現在、三重県や愛知県では多くの集団が失われてしまい、岐阜県内でも多治見、土岐、瑞浪、恵那、中津川といった東濃地方に残るのみとなりました。そのためには準絶滅危惧種、岐阜県からは絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。

シデコブシは日当たりの良い場所を好み湧水湿地とよばれる湿原とその周辺に生育しています。気温が低下した氷河期に南下してきたコブシのなかに、湿地の環境に適した変わり種が生まれシデコブシになったと考えられています。氷河期が終わりコブシは再び北上しましたが、シデコブシは湧水湿地という特殊な環境を利用して生き残ってきたといえます。

シデコブシの生育する湧水湿地には、世界的にも希少なハナノキ、ヒトツバタゴ、クロミノニシゴリ、ヘビノボラズといった樹木、シラタマホシクサ、ミカワバイケイソウ、カザグルマ、サギソウといった草本、さらにハッチョウトンボ、ヒメヒカゲ、ヒメタイコウチ、ホトケドジョウといった小動物がともに生きています。シデコブシを保全することは、こうした希少な生き物や湧水湿地などを保全することにもつながります。

15m、幹の太さが直径20cm以上にまで生長するものもあります。4月初旬に淡紅色や白色で、普通のコブシと違い枚もある花を咲かせます。花びらが神道で使われる「シデ」に似ていることから「シデコブシ」と呼ぶように

に生育する希少な東海丘陵要素植物の一つです。現在、三重県や愛知県では多くの集団が失われてしまい、岐阜県内でも多治見、土岐、瑞浪、恵那、中津川といった東濃地方に残るのみとなりました。そのためには準絶滅危惧種、岐阜県からは絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。

気温が

低下した

氷河期に

南下して

きたコブシ

のなかに、

湿地の環境

に適した

変わり種が

生まれシデコブシ

になったと

考えられて

います。氷河期

が終わりコブシ

は再び北上

しましたが、

シデコブシは

湧水湿地

という特殊な

環境を利用

して生き残

ってきたとい

えます。

シデコブシの

生育する

湧水湿地

には、世界

的にも希少

なハナノキ、

ヒトツバタ

ゴ、クロミノ

ニシゴリ、

ヘビノボラ

ズといった

樹木、シラ

タマホシク

サ、ミカワ

バイケイソ

ウ、カザグ

ルマ、サギ

ソウといっ

た草本、さ

らにハッチ

ョウトンボ

、ヒメヒカ

ゲ、ヒメタイ

コウチ、ホ

トケドジョ

ウといった

小動物が

ともに生

きていま

す。シデコ

ブシを保全

すること

は、これ

らした希

少な生き

物や湧水

湿地など

を保全す

ること

にもつな

がります。



●シデコブシ生息地

シデコブシと近似種をくらべてみよう！



シデコブシ



タムシバ



コブシ



本州以南の日本各地の山地に分布するモクレン科モクレン属の落葉小高木で、樹高は4~5m、稀に10mにもなる。花は4月の中旬に咲き、6枚の白い花弁で、萼片は3枚で白く、小さな花弁のように見える。葉は噛むと独特の甘味があり、カムシバやサトウシバ等の別名もある。

北海道から九州、朝鮮半島南部の山地に自生するモクレン科モクレン属の落葉高木で、樹高18m、幹の直径が60cmに達するものもある。3月中旬頃に枝先に直径6~10cmの花を咲かせる。花は6枚の白い花弁からなり、基部は桃色を帯びる。つぼみや果実の形状が握り拳に似ているため「コブシ」と名付けられた。

春



開花し始めた花



めしべ

花びら

おしべ



花の構造

シデコブシの花は両性花で、めしべとおしべが一つの花の中に両方あります。雌性先熟といってめしべが時間的に早く成熟し、おしべが遅れて成熟するので、同じ花の中で受粉が起こることはありません。



満開のシデコブシ

夏



葉が茂ったシデコブシ



萌芽したシデコブシ



実生

秋



株立ち



樹皮と不定枝

冬



芽を付けたシデコブシ



葉芽



花芽



果実



成熟した果実



種子

市指定
天然物
平成7年4月1日指定

1 若山のシデコブシ
指定木の大径木2本を含め5本を確認。500m北に離れた場所には市指定の保護地もあり、50本以上のシデコブシが群生。比較的良好な状態で保存されている。



2 星ヶ見の群生地
ひょうたん湖南側の湖畔斜面にある湧水湿地からなる群生地で約330株を確認。春は対岸の星ヶ見岩から群生地が眺められる。エリア内の湧水湿地にはシラタマホシクサやハナノキも見られる。



県指定
天然物
平成20年1月15日指定



3 岩屋堂の群生地
10mに及ぶ高木から中低木にわたり約130株あり、希少な草本植物もみられる。毎年、地域の協力を得て、県の「清流の国ぎふ・環境基金」を活用し、支障木の伐採など、日照条件の改善に取り組んでいる。



4 深沢の群生地
中垣外川沿いの田畑と植林地の際を縫うように長く伸びる。平成25年の調査で169株を確認。大径木もあり見ごたえがあるが、多くの株が被陰されているため環境整備が必要である。




市指定
天然物
昭和58年8月18日指定

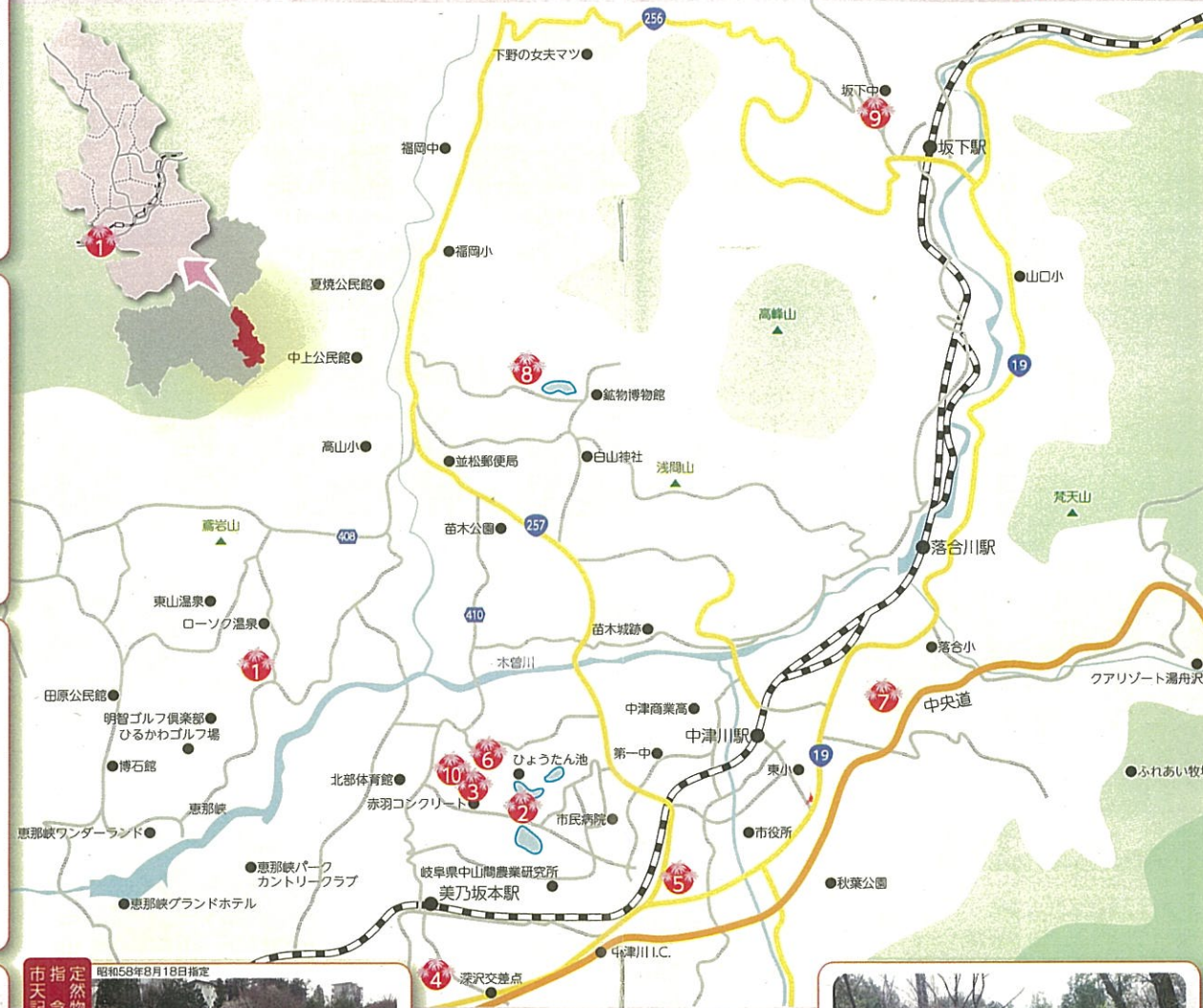


5 会所沢の群生地
宅地や車道が近接する狭い斜面の沢筋に分布。スギなどの高木による被陰状態を県の「清流の国ぎふ・環境基金」を活用し日照条件の改善を図っている。



主なシデコブシ分布マップ

市内には大小含めて100ヶ所余のシデコブシ自生地があります。主な自生地をで表示しました。



7 岩屋堂ハナノキ自生地内 群生地
世界最大のハナノキの自生地内に約580株のシデコブシが自生。西山の群生地の次に大規模な自生地。里地山にある優れた湧水湿地で希少植物以外にもホトケドジョウやオオタカなども確認されている。



市指定
天然物
平成9年3月3日指定



6 矢淵のシデコブシ
指定木1本を含め大径木2本がある。川上川の左岸側の岸辺にあるのが指定木で、自通り1.2mの老木である。土地所有者により守られているが、次世代の株を残す対策が必要である。



市指定
天然物
平成18年8月31日指定



8 井波のシデコブシ
目通りの周囲が1.5mもある。全国でも最大級に幹が太いシデコブシ。ため池崖に単木で立ち、周辺に幼木姿は見られず雑草木が繁茂。枝の折損や先端部の枯れが進み、全体に衰弱気味である。



6 西山の群生地
市内でも最大規模の自生地で、ひょうたん湖流域の谷間沿いの広いエリアに約720株を確認。湖から流れる水路沿いの斜面に多く自生。ハナノキやミカヅバ、イゲソウ、カザグルマ等の希少種も多い。



7 子野の群生地
丘陵傾斜地の中腹から下方に流れる沢に至る場所に約400株が点状に分布している。林内には広葉樹の高木が枝を張り、竹の侵入も見られ、幼木の個体数は少ない。日照条件が悪く、ヒヨロリと葎た幹の木が多い。群生地としては国内東限。



中津川市のシデコブシの現状

市内には100ヶ所以上もの自生地があるといわれています。天然記念物指定地のように多くの人に知られた自生地もあれば、春先の白い花でやっと気がつく自生地もあります。中津川の自生地の特徴は、人の生活する場に隣接していることです。田んぼやため池の縁、植林地や里山の中の小さな谷、川の縁など、少し足を延ばせば見ることができます。中には、狭い面積ながら本来の姿をとどめる典型的な湧水湿地にあるシデコブシ自生地もあり、そうした場所ではシラタマホシクサ、オオミズゴケなど湿地性植物もかろうじて生き延びています。

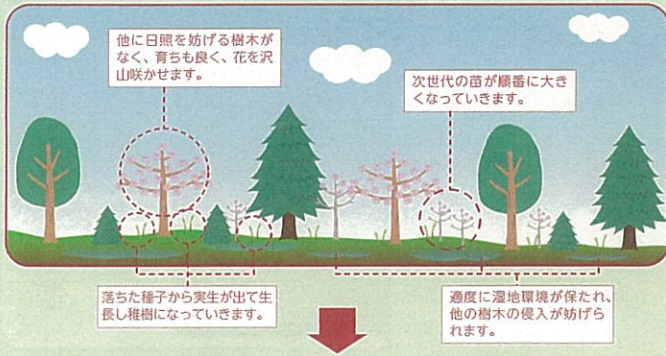
【シデコブシ自生地は少子高齢化の限界集落】

市内で詳しく調査した61ヶ所のシデコブシ自生地を例に見ると、200株以上の群生地は4か所しかなく、自生地の約53%は10株以下が生育しているだけです。株数が少ないということは、その自生地が近い将来なくなる可能性が高いことを意味します。さらに、残っているシデコブシを調べてみると、大きな幹（成木）が多く、次の世代を担う小さな実生や稚樹がほとんど見られません。つまり、自生地の多くが「過疎化の進んだ少子高齢化社会」で「限界集落状態」になっているといえます。

【瀕死のシデコブシ】

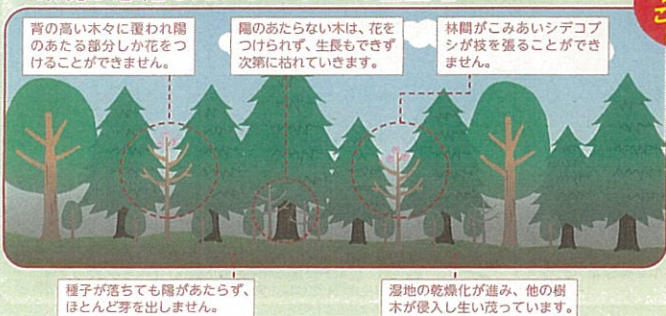
また、自生地にわずかに残ったシデコブシも周辺のほかの種類の樹木が大きくなり、日光を十分に受けられなくなっています。このような状態を被陰といい、市内のシデコブシの、実に43%が被陰された劣悪な環境で生きています。シデコブシは光が少ないと生長できないので、花の数が減ったり、最悪の場合には枯死する可能性も高いと考えられます。

◎良好なシデコブシの自生地



日照をさえぎる樹もなく、過湿な環境が保たれた自生地（土岐市内）

△環境が悪化したシデコブシの自生地



樹間が混み合い、他の樹に日照をさえぎられている自生地（西山の群生地）

今多くの自生地がこの状況にあります



シデコブシが自生する 湧水湿地

湧水湿地は斜面からの湧水で潤わされる湿地で、1000㎡に満たない小規模なものが多いのが特徴です。山のふもとや谷間に多いので、ゴルフ場・道路などの開発や埋立行為により消失してきました。また湿地周辺の里山を人が利用しなくなり、里山の木々が大きく成長しシデコブシの光環境を悪化させました。人の影響でシデコブシの自生地が失われ、また残された自生地でも本数が減り、生長が悪化しているのが今の姿です。

シデコブシは他の種類の樹木があまり好まない湧水湿地という過湿な環境でも生きることができます。しかし、最近では湧水が減ったり、溝が掘れて湧水が集中して流れたりすることで多くの自生地では湿地の乾燥化が進み、他の樹木が徐々に侵入し生長するようになりました。

人がそれほど住んでいなかった頃は、一つの自生地がダメになっても別な場所に新しい湧水湿地が生まれ、そこにシデコブシが根を張り、転々と場所を変え生き延びてきたと考えられています。今、そのシステムが人の手による開発・市街化が進んだために、シデコブシが生育できる場所が失われています。



湧水湿地とその表面（蛭川地内）

中津川の湿地に自生する希少な生きもの



シラタマホシクサ



ハナノキ



サギソウ



ミカワバイケイソウ



ハッチョウトンボ



ヒメタイコウチ

人の手で守るしかないシデコブシ

春に市内の至る所でシデコブシが見られるため、「まだ、沢山見られるから問題ない」「別に珍しいし、本当に希少？」などと勘違いされます。樹木は寿命が長いので、今生育しているシデコブシが今後100年くらいの間は残っているかもしれませんが、後を継ぐ実生や稚樹が少ない状態では、100年の間にどんどん数が減り、私たちの子どもや孫の代には花を咲かせるシデコブシがなくなっているかもしれません。

人の手でシデコブシの自生地をなくしてきたのですから、人の手で守るしかありません。今は、生きてシデコブシを少しでも元気にし、より長く生きてもらうことが大切です。そのためには、シデコブシを被陰している他の樹木を伐採し日照条件を改善することが必要です。そして、自生地に光が多く入ると、より多くの花が咲き、種子が作られ、そしてたくさんの実生や稚樹が育つ条件が生まれます。

さらには、種子を採取し、その種子で苗を作り、ある程度大きくなったらもとの自生地に植樹することが必要です。そのときに大事なことは、植樹する場所は明るくし、植樹した後しばらく草刈りなどを続けること。そして一番重要なのはその自生地で採取した種子を使うことです。

シデコブシに代表される希少生物保全活動は、生態系の保全の面からも重要な取組といえます。自然がくれた宝を、自分たちの手で守ることが、本当の意味での自然との共生といえます。